

4. 歴史における境界(2) —ジェンダー—

2025.10.27. 大橋 幸泰

はじめに

現代人も歴史的存在／私たちの常識・価値観は歴史的につくられたもの
*たとえば、国家への帰属意識／それに支えられている国民国家も歴史的産物

国民国家／実際には虚構：「想像の共同体」

→特に、マイノリティや女性の国民化に、国民国家の矛盾が先鋭的に表れる

*本日は、ジェンダー(性差)の矛盾を考える／ジェンダーはそれぞれの時代の秩序により可変的

1. 前近代のジェンダー—近世の場合

(1) 政治とジェンダー

将軍家と大名家／世襲制による継承／「表」とともに「奥」の存在が不可欠

→奥向きにおける正妻・側室とその側近を務める女性／内証ルートによる表向きへの介入(人事・財政)など

*実際、内証ルートによる大名家の昇進運動

(2) 身分・家とジェンダー

近世社会の家とジェンダーを考える際の留意点

a. 近世社会における庶民の家相続／男性優位の傾向だが、男系・父系優先ではない姉家督(長子相続)の事例

→ジェンダーより家の存続を優先／一方で、村社会において女性が排除されている点も指摘される

*いずれにしても、ジェンダーのあり方は一律ではない／地域の慣習も影響

b. 「女」という記号／「女〇〇」という表現は近世に成立

→18C、女性の身分・職業だけを集める書物が登場／性や芸能を売る職業か、内職の仕事

(3) 性売買の体制化

遊郭の成立／近世城下町の成立と不可分

→特に江戸は、参勤交代の武士、大店の奉公人など、膨大な数の男性の存在／秩序維持・風俗統制のため、
遊郭を公認／都市金融が農村女性の身売りに吸着して、性売買を維持する広域的システムの成立

*近世の支配構造が性売買のシステムをつくりだした

2. 近代のジェンダー

(1) 政治とジェンダー

近代以降、政治組織として官僚制が成立／奥向きの存在が否定され、完全に女性は政治から排除

→加えて、民法により、家制度の法制化(1898 明治民法公布)／女性は財産権などの権利が剥奪される

→家に束縛される状態が固定される／近代秩序に適合的な女性のあり方が求められる

大日本帝国憲法発布(1889)・帝国議会開設(1890)の歴史的意義

a. ジェンダーの視点に立たない見方／近代化・民主化への前進、という評価

→議会開設と同時に、女性の政治活動が禁止された事実(1890 集会及政社法)を見落としている

b. ジェンダーの視点に立つ見方／女性を排除する起点、という評価

→男性には部分的に参政権付与、女性からは参政権剥奪

(2) 女性解放運動の展開

男性本位の大国化への違和感から、女性解放運動の気運上昇(1910代)／『青鞥』の発刊(1911)など

→平塚らいてう・市川房枝らによる婦選獲得運動へ(1920代)／婦人三権の獲得を志向

* 参政権(国政への参加権)、結社権(政治結社結成・加入の自由権)、公民権(地方自治への参加権)

→結社権・公民権を認める法案、衆議院通過(1931.2.)／しかし、貴族院の反対で不成立

→内外情勢の閉塞状況、軍部・右翼の発言権拡大／婦選獲得要求への逆風(1930代)

→女性解放運動の転換／国家への「同調」

a. 国民精神総動員運動(1937)への協力／「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません勝つまでは」

b. 選挙粛正運動への参加(←政党政治への不信感、高揚)／議会政治否認を後押し

政党解散、大政翼賛会成立(1940)へ

→積極的な戦争協力／「女の務めは銃後の護り」

* 大日本国防婦人会(1932発足→1942大日本婦人会へ統合)の活動

3. マジョリティ秩序の相対化

国民国家の矛盾／国民としての一体性という幻想の中で、マイノリティ・女性の個性・自立性を否定

→マイノリティ・女性は差別を克服しようと、マジョリティに近づくことを企図

* マイノリティ・女性の犠牲のうえにマジョリティの秩序が貫徹

マイノリティ・女性の「個性」「自立」を保持する難しさ

→マジョリティの枠組みを相対化する必要

* どうしたらマジョリティの秩序・枠組みを相対化できるか？

直接自分にかかわらないことへの無関心は、結果としてマジョリティへ負担

* 「無知は罪」との金言

おわりに

日本列島における多文化性／マイノリティ(沖縄・アイヌ)・女性だけでない

* 和人社会の地域性、在日外国人の存在／日本列島の文化を単色で塗りつぶすことはできない

→国民としての一体性という幻想の中で、マイノリティ・女性の個性・自立性を否定：国民国家の矛盾

→「周縁」の人々は、差別を克服しようと「中心」に近づくことを志向／「周縁」の人々の負担、増加

* 「中心」というカテゴリー(マジョリティ)を相対化する必要

【参考文献】

鹿野政直『婦人・女性・おんな』(岩波新書、1989年)

久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵編『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』(大月書店、2015年)

横山百合子『江戸東京の明治維新』(岩波新書、2018年)

国立歴史民俗博物館監修『新書版 性 差の日本史』(集英社インターナショナル、2021年)

福田千鶴『女と男の大奥—大奥法度を読み解く』(吉川弘文館、2021年)

【付記】

・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。